



日本最大級

# 大しめ縄

地域の人々と作り上げる  
日本一の大しめ縄

日本最大級といわれる大しめ縄は、長さ13.6メートル、重さ5.2トンもあり、昭和30年代から数年ごとに出雲大社神楽殿に奉納されてきました。その高い技術と伝統は今なお受け継がれています。

しめ縄づくりは、町民による赤穂もちの田植えからはじまり、実入りしない時期に刈られ、乾燥保存されます。その後、稲ワラは、調整・選別、束ねられ、しめ縄の元となる「中芯」と、中芯を包む「コモ」が作られます。中芯がコモに包まれた後に、大しめ縄に取りつける円錐型の「しめの子」が作られます。最後に、「大撚り合わせ」が町民により行われ、大しめ縄が完成します。

飯南町では、飯南町注連縄企業組合が主体となって、出雲大社や、社寺などのしめ縄制作・奉納を行っています。全て手作業で、稲ワラは町内産を使用するなど、まち全体で力を合わせて制作しています。



最後の「大撚り合わせ」は、昔から地域の人々が力を合わせて行ってきました。地域の人々の手によって、「中芯」に「コモ」が巻きつけられることで、美しい表面のしめ縄が出来上がります。季節や天候、湿度などで微妙に変わるワラの質感を、長年培った手の感覚で感じ取り、均一になるように編んでいきます。

Column  
笑顔のヒミツ  
インタビュー

飯南町注連縄企業組合  
専務理事 那須 久司さん

**日本一の大しめ縄を  
次の世代に**

大しめ縄創作館では、職人や地元の方々が「一つひとつの想いを込めてしめ縄を制作しています。館内には、迫力ある実寸大の「しめの子」をはじめ、さまざまな種類のしめ縄や、その歴史に関する資料を豊富に展示しています。

しめ縄づくりの面白いところは、「一つとして同じものができないところ。また、神棚をはじめ、壁掛けやストラップなど、生活に溶け込めるのも魅力のひとつですね。

日本一の大しめ縄を作っている飯南町の誇りと伝統を次の世代へと受け継いでいきたいです。

## 時代をつなぐ 時の旅へ

自然が人々に生きる術を与え、  
人々は歴史をつないできた  
その歴史は、時を越えて現代へと受け継がれている

### 原始から 古代



▲長者原(ちょうじゃばら)古墳(町指定文化財)  
五明田(ごみょうだ)遺跡縄文土器(町指定文化財)



▲土偶(下山遺跡出土)



◀出雲國風土記(日御碕神社本)



飯南町に人が住みはじめた時期は定かではありませんが、三瓶山麓の縄文遺跡からは今からおよそ1万年前の土器が出土し、神戸川と中国山地の恵みによって暮らしていた人々の痕跡を示しています。飯南町の遺跡からも石包丁や鉄製の鎌が出土し、稲作が日本列島に広がっていった弥生時代、この地域でも米作りが行われていたことが分かっています。奈良時代に成立した「出雲國風土記」は、飯南町に関する最も古い文献資料です。

### 中世



▲赤穴瀬戸山城(近世初頭の復元イラスト)  
イラスト：香川元太郎/「歴史群像」2020年10月号初出  
(ワン・パブリッシング刊)



### 近世



◀▲銀山街道の道標と石碑

江戸時代になると、銀の輸送は陸路が主となり、島根県大田市大森から広島県尾道市までの銀山街道が成立しました。街道が通過する赤名宿と周辺の村々には、銀・銅を次の宿場まで運ぶ役割が課され、負担軽減を求める訴えがたびたび起こりました。現在も、赤名宿には石見銀山の道標が残っており、積雪の時期に銀の運搬が行われた赤名峠には石碑が建てられています。

飯南町は、かつて出雲国、石見国、備後国の三国にまたがる国境であり、交通の要衝として、また出雲国への入り口として重要視されていました。そのため、戦国時代には、たびたび大内氏、毛利氏、尼子氏などの勢力争いの戦場と化しました。大内氏の出雲遠征の際には、瀬戸山城を舞台に攻防戦が繰り広げられました。現在、城址には登山道を整備しており、石垣や土塁などを確認できます。

### 近現代



▲高殿たたら地下構造(弓谷遺跡)▲  
▲奥飯石及び周辺地域の積雪期用具(国指定民俗文化財)

江戸時代から明治時代にかけて、この地域の重要な産業の一つが製鉄業であり、たたら製鉄が大規模に行われました。山々を切り崩し砂鉄を採集するための「鉄穴流し」の名残が、今もまちの至所に残っています。他にも、寒い地域ならではのワラを編んだ積雪期の民具などは、今でも大切に保存・展示されています。

明治、昭和になると村が合併を繰り返し、平成17年には、当時の赤来町と頓原町が合併し、現在の飯南町が発足しました。